



災害対応研究会 ニュースレター
第5号 2001.1

タイトル：大森康正 イラスト：瀬尾理

会員リレーエッセイ

「2001年 の旅」

富士常葉大学環境防災学部 小村隆史

新しい年、新しい世紀を、新しい地元である鈴鹿の椿大神宮の社殿前で、新しい家内と迎えた。21世紀というと、ずっと先のような気がしていたけれど、迎えてみれば正直言って意外と感慨のないものだった。今回の年末年始も年賀状書きで追われた。例年通りの越年である。

とはいえ、2001年である。「2001年」と聞くと、やはり「宇宙の旅」と続けたいくなる感覚は、SFファンであればわかってもらえると思う。僕は、アーサー・C・クラークによる小説(原作?)に接したのが先で、スタンリー・キューブリック監督による映画が後になったが、映画化(あるいは小説化)に失敗する例を見る中で、二人の巨匠の良い意味でのぶつかり合いがあったせいか、共に読み応え・見応えある作品であった。

いつのころからか、SF小説を読まなくなってしまった。高校生・大学生の頃は、ハヤカワSF文庫の青背表紙が部屋の中にくっついていて、最近では本屋でSFの並んでいる棚に行くことも少なくなってしまった。ある時、そのことに気付いて、愕然としたことがある。良いSF小説は、こちらが読み込めば、幾らでもアイデアを与えてくれた。

ただ、大変残念なことに、災害対応を考える上でアイデアを与えてくれるようなSFにはまだぶつかっていない。SFに接する機会が少なくなったこともさることながら、防災が切実な問題になり過ぎて、SFを楽しむようにアイデアの世界に遊ぶことが出来なくなってしまったからなのかもしれない。もしそうならば、ちょっとまずいなあと思う。防災学のようにこれから勝負の分野では、どれだけ豊かなアイデアが持てるかが勝負の分かれ目となるだろうから。ということで、2001年は、「宇宙の旅」ならぬ「SFの旅」を再び始める年にしたいなあと思う、年の初めであります。

(ペンを時事通信社神戸総局の中川和之さんにまわします)

目次 - 第5号 -

会員リレーエッセイ 「2001年 の旅」	小村 隆史 1
第11回話題提供ダイジェスト		
「災害記録の資料化」	田中 聡 2
「神戸市検証報告～生活再建分野～」	林 春男 5
事務局からのお知らせなど	 8

災害記録の資料化

田中 聡 氏（京都大学防災研究所総合防災研究部門・助手）



災害の調査・研究をしていくときに大きく分けて2つの側面があるのではないかと思います。1つに基本的なものとして、昔からやられている物理現象としての災害の研究。これに対して特に阪神・淡路大震災後、防災の世界でも重要だと考えられてきたものが、社会現象としての災害というものです。簡単に言えば、まず最初に避難行動から始まるような一連の人間の対応行動や、それに対する様々な施策というものが社会現象の中に入ると思います。これらを体系立てて戦略的に考えていかなければ、物理現象の災害だけでは被害を完全に防ぐことができないというのが徐々に言われるようになってきました。もちろんまだメインストリームではありませんが、そのような話はかなりあちこちで出てきております。しかし社会現象としての災害は、なかなか再現実験ができない。だからこそ一つ一つのイベントを大切にし、それを詳細に検討していかなければいけないのではないかと考えています。そして支配法則がかなり無数にあると思います。被災者それぞれのプロフィールによっていろいろなパターンが表れ、地域や国によっても違ってきます。そういうものを扱うにはどうすればよいかというと、それぞれの現象を詳細に見て、現象間の比較によって違いを明らかにしていくことが基本的な研究方法ではないかと考えています。

社会現象としての災害を定義づけると、「災害という大規模な環境変化に起因した、被災者や災害対応者と彼らを取り巻く各種の文化・制度・装置群とのダイナミクスである」と考えていきたいと思えます。それはダイナミクスというように動いているものですから、動いている運動そのものはおそらく観測できないと思えます。私たちに見えるのは、その動いた足跡みたいなものが様々なかたちで記録や証言として残り、それを観察、解析していくという手法をとらざるをえないということではないかと思います。

それらをまとめて、「災害過程」と私たちは言っておりますが、認められた言葉ではありません。これを研究していくのが社会現象としての災害の研究であると捉えています。

そこで、実証的なデータに基づいた、それぞれの現象の個別的な記述を集めていかなければならない。その蓄積と分析の上に立って初め

て、社会現象としての災害の研究が1歩、2歩と進んでいくのではないかと考えています。この個別的記述の集積を、私たちは「災害エスノグラフィー」と呼んでいます。

「災害人類学」と名付けたもの

エスノグラフィーというのは、元来文化人類学や社会学などの分野の言葉であるとお気づきの方も多いと思います。元の文化人類学とはどのようなものかということ、「人間およびその表す諸現象を対象とし、その多様性を追求し変化を研究する学問である」とももの本には書いてあります。その諸現象について、人類学というのがこの分野ではずいぶんあります。例えば、人間と経済に着目した多様性とその変化を研究していくのが経済人類学です。そのほか観光人類学や医療人類学、言語人類学など。最近ではコンピュータ民族学(人類学)というような分野まであるそうです。

そこで災害というのも人間とその行動に対し様々な影響を与えているわけですから、これもある意味では人類学の分野の1つになりうるのではないかと考え、私は「災害人類学」と名前をつけました。名前をつけたからには定義をしなければいけませんので、「災害に起因した人間およびその表す諸現象を対象とし、その多様性を追求し変化を研究する学問である」としました。もちろんこれもまだ公認されているものではありませんが、今後やる人が増えていきますと、私は会員番号の一桁ぐらいはもらえるのではないかと考えております。

「災害エスノグラフィー」の考え方

通常人類学あるいは民族学というところでは、それぞれの民族の生活様式や、経済に着目すれば経済のさまざまな様態、言葉に注目するならば言語の様態というものを、そこへ行き、

その場で一緒に生活をしてそれらを調べ上げ、それに対するドキュメントを残す。これを「民族誌」と呼び、一般に「エスノグラフィー」と呼ばれているものです。同じように災害の発生した場所へ行き、そこで「生活誌」というわけにはなかなかいきませんが、個別的な様々な事例についての記述を残す。これを「災害エスノグラフィー」とします。「民族誌」というと民族と民族の比較という話になってしまいますので、そう呼ばずに「エスノグラフィー」と呼びます。

もう1つは、文化人類学の特徴として比較研究であるということが言われています。同じように、それぞれの現象ごとの比較ということの研究のもう1つのポイントにすえていきたいと考えております。

では具体的にはどういうことをやるのかというと、「災害過程についての個別的記述」です。災害現場に居合わせた被災者や災害対応者の視点からその災害像を描くということを考えなければいけない。それはどういうことかということ、暗黙のルールや原則、あるいはそこにあった文化をその場に居合わせなかった人々に理解可能な知識体系に翻訳することです。どこに注目をしていくかということ、例えば災害現場における人々の関係のあり方や、災害対応で重要になる様々な対象との関係のあり方ということに焦点を当てて記述を残していくことになると思います。

そのような記述を作っていくにはどうすればよいか。ここで発生する問題点は、人類学の場合は、ある場所へ行き、そこで生活をし、観察者の目を得て記述されるわけです。そういう観察者あるいはそれを書く人をエスノグラファーと呼びますが、このエスノグラファー個人の資質に最終的な成果の出来上がりが左右されてしまう。従って、非常に資質のある人がたくさんいればいいのですが、なかなかそういうわけにはいかない分野ですと、たくさんやってもその質に差が出てきてしまう。記述の蓄積がこの分野のデータであると考えたときに、それは後々問題になってくるのが考えられます。そこで、データの収集やそれぞれのケースの編集・分析・評価のプロセスに対し何らかの標準的な研究方法を開発する必要があります。

96年ごろから西宮市で始めた、被災された個人に対するインタビューと、いくつかのグループに対して行ったグループディスカッションが最初です。その次に現在も進行中ですが、神戸市中央区と長田区を中心にインタビューを行っています。西宮市の個人インタビューと

長田のインタビューは、ハイパーリサーチの浦田さんがご担当なさっています。つまり、多くのデータは浦田さんの資質に全部かかっており、非常にいいデータが取れているという結果になっています。

データ収集の方法は、インタビューの方法をとります。もう一つ、文化人類学には参与観察するという手がありますが、やはり災害の場合にはそういうことがお互いの負担になり、難しいこともありますので、基本的には信頼関係を確立したあと、インタビューの調査というのをやらせていただいております。

実施の時期ですが、どのような時期がいいのかということ、やはりある程度落ち着き、生活もできれば安定している時期がいい。とはいえ、あまり時間がたってしまうと、今度は記憶を合理化してみたり、自分なりに整理をするというバイアスがかかってしまう可能性がありますので、私たちは約1年後というのをポイントにしています。もちろん現在進行中のものは4年、5年とたっておりますが、スタート時点ではそのような話で進めてまいりました。

方法としては、あらかじめアンケートのように質問事項を決めない方法をとっています。なるべく話がしやすいように時系列に沿った話題の展開をし、ここが特徴だと思いますが、3つの視点というものをいつもお伺いしております。それは、「絶対に次やるべきこと」「絶対にやってはいけないこと」「もっと工夫すべきこと」を教えてくださいというかたちで話を進めて、データを収集していきます。

文化項目分類（OCM）によるコード化

得られたデータは、通常そのままテープおこしに回されますが、会話をそのままおこすと、基本的にはほとんど読み物にはなりません。単に読むだけでもものすごい労力がいり、話があちこちへ飛んでみたり、話題が途中で消えてまた突然復活したりと、非常に煩雑です。そこで、ある程度読み物のかたちになるように編集しなければなりません。それと同時にこれはデータですので、後々の検索ということを考えると、何らかのコードを振っておきたいと考えます。ところが社会現象としての災害を扱うのに適したコードが防災の世界で出来上がっていなく、このコードの問題をどうするのかというのが問題です。また原稿化についても、編集の部分はものすごく時間がかかるというのもつけ加えさせていただきたいと思います。

コードの問題ですが、もう一度文化人類学に戻って見てみますと、非常におもしろいコード

セットが存在します。それは文化項目分類（OCM）と呼ばれているもので、人間の使用する道具、行為、思想など人類文化全領域にわたるほとんどの項目を分類しているものがあります。HRAF（フラーフ）という、莫大な量の世界の民族に対する文献がファイルになっています。例えば宗教に関することを調べるときには、何らかのかたちでコードを振っておかないととても調べられるものではなく、そのコード化のために、かなり古く（1940年ぐらい）からアメリカで開発されたコードセットです。このような文化項目分類（OCM）と呼ばれているものと、もう一つは地域・民族による分類（OWC）と呼ばれているものの2つの組み合わせがあります。

例えば「15 行動の過程とパーソナリティー」というのはどういうものかということ、その中の小項目に「152 動因と情動」があります。中は基本的な衝動、怒り、不安というような誘発された動因と情動、あるいはその調節という話があり、インタビューの中でも不安、怒り、暑さ、寒さに対する不快感というものがずいぶん出てきました。そういうものに対しては、このような番号でコード化をし、処理していこうと思います。

テープおこしを読んでみて初めてわかったのですが、人の会話というのは意外とエピソードごとに切れています。例えば家具の話をしていたら次は住宅の話。それでまた家具の話に戻ったと思うと、向かいのおじさんのコミュニティの話になったりします。そこで、まずこの原稿を読みながらパラグラフに切っていきます。さらに、それぞれのパラグラフに該当する内容のコードを振っていきます。

たくさんあるトピックをまとめていくと大体3つのことに集約されるような気がします。1つは、対象者の時間の流れに沿った実際の行動。そして、ある時点・期間における状況の描写というのがあります。3つ目が、震災からの教訓や対象者の考え、思いです。これらが、社会現象としての災害を研究する上でのキーポイントになっていくのではないかと考えています。

ケースとエスノグラフィーの定義

先程「ケース」と呼んでいるものと、「エスノグラフィー」と呼んでいるものをはっきり仕分けをしておこうと思います。

それぞれの対象者から得た一連の話を「ケース」と定義します。そのケースを編集する作業とは、「震災を体験した人々あるいは被災地に

限定されていた震災に関するさまざまな知識を、インタビューという被災者との共同作業によって共有し、言語化することによって明示的な知識へと変換・翻訳する作業である」と考えます。これが「ケースの編集」です。明示的な知識で読みやすくなるというのもそうですし、グルーピングをするというのもそういうことです。「暗黙知の形式知化」とその筋では言うそうです。コードをつけるというのは、「言語化された知識体系への変換作業」と考えられると思います。

「エスノグラフィー」というのは、それぞれのケースで得られた知識を組み合わせることにより、新たな知識を創造するプロセスを言います。断片的な体験にすぎない個々のケースを集めて体系化することにより、災害過程の全体像を構築する作業を「エスノグラフィーの作成」と呼びたいと思います。

震災後10時間、100時間、1000時間、1000時間以上と時間を区切り、それぞれのケースのOCM（項目）がどの時間帯に存在しているのか分析し、その割合の多い方からランクづけしました。この結果、それぞれの時間帯における話の内容から、全体の特徴が見えてきました。これを「災害過程の同定」と呼びたいと思います。具体的に高松町の例をあげると、震災後10時間以内は「被災者は、まず突然の激しい地震に驚き恐怖を感じた。さらに強い揺れに伴って倒壊する家具。そして壊れた家具によってけがをした被災者が多数いたことが浮かび上がってきます。倒壊した家屋では身近にあった道具で救出活動を行うが、救命の努力にもかかわらず多くの死者が発生した」。このように災害過程を再現できるのではないかと思います。

このほかの地域も、それぞれ同じようなかたちで作業をしていくと、うまくいけばそれぞれの地域の特徴が表れてくるのではないかと考えています。

以上のようなものが「災害エスノグラフィーの作成」です。なぜ今日このようなものを紹介したかということ、これから起こる災害で、皆さんが被災地へ行き、いろいろな証言を取ったりする作業をなさると思います。そのときに、できれば同じような手順で作業をしていただき、このようなデータベースを少しずつでも増やしていければと考えております。これをばらばらなフォーマットで始めてしまうと、最後にデータの整合性を合わせることが非常に難しくなってくると思いますので、紹介をさせていただきました。

（文責 青野）



この会では、4月に河田先生(京都大学) 8月には重川先生(富士常葉大学)と、それぞれ兵庫県の「震災対策国際総合検証会議」の検証員としてご担当された内容について報告していただきました。今日、私がお話するのは神戸市がやった「震災復興検証」の方です。こちらは「生活再建」「安全都市」「住宅・都市再建」「経済・港湾・文化」の4つのテーマにしばって検証をしまして、そのうちで私の担当した「生活再建」について報告させていただきます。このテーマ、とても1人ではできないので、関西学院大学の立木先生にご協力をお願いして終始助けていただきました。立木先生だけでなく、実質的には田村さん(関西学院大学大学院修士課程)にもずいぶん助けてもらいました。

物理的な時間の流れと心理的な時間の流れ

災害のあとの時間の流れを考えると、物理的な時間の流れと心理的な時間の流れはやはり違います。図1は、横軸に物理的な時間の流れを等間隔に10年取り、縦軸は同じ10年を時間の対数尺で乗せて並べてみたものです。

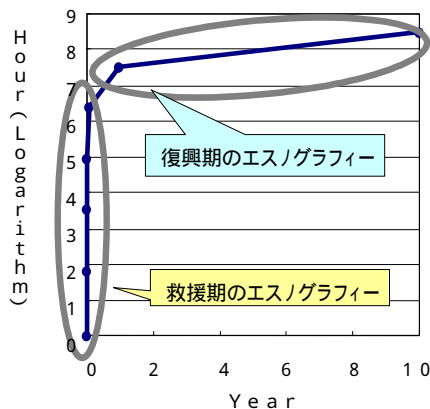


図1：2種類あるエスノグラフィー

災害の発生直後は、状況が目まぐるしく変わっていきます。私たちは10時間、100時間、1000時間、1万時間という時間の区切りを言ってきましたが、あれも実は対数軸をイメージしたものです。田中先生の質疑の中で柳原さん(ハイパーリサーチ)が指摘されていましたが、自分の命に関わっているところから、だんだんに関心が外へ向き、長期的な意味での生活再建にいくということがあると思うのです。1年ぐらいまで急激にいろいろな展開

があります。

今回の震災では、実際には1年まで行かずに途中でぐっと棒が折れるところがあります。これは、被災者復興支援会議で一緒だった小林さん(コー・プラン)と最初の秋によく話したのですが、あの頃、ものすごく閉塞感がありました。それまではテンポよく事態が進捗してきたものが、復興計画ができてしまった途端に残るは実現しなくなってしまう、「この毎日はずっとこれから10年やるんだ」という感覚を持ったときのあの閉塞感というのは今でも忘れません。

先程田中先生が話してくれたのは、言ってみれば救援期のストーリーをエスノグラフィックに書いたものでした。私がこれからお話ししようとするのはその次の段階、つまり、復興計画を実現していく長く、辛い変化の少ない時期で、ほとんどマスコミにも取り上げられなかったこの5年を中心に進めたいと思います。

「被災者の生活再建」が最大の課題

最近、私はこんな説明をしています。

まず1つは「被災者は最低4つに区分できる」ということです。1番目は命の危険にさらされた人、2番目は財産を失くした人、3番目は生活支障を体験した人、そして4番目は生まれて初めてあんな地震を体験したと思いい興味にかられた人、そんな4つに分けて考えてみたらいいのではないかと、いうことです。

次に「災害対応の時間的展開」についてですが、昔は100時間、100日、10年ぐらいの切り方をしていました。しかし、災害対応というのは、命を守るための仕事(緊急対策)は最初の72時間だし、社会のフローを救済するための仕事(応急対策)というのは最初の100日ぐらいのところが一番華やかな部分があり、社会のストックを再建するための仕事

(復旧・復興対策)というところに今フォーカスが当たっていて、これからも続けていくわけです。この3つの社会的なサービスを実際に運営するためのロジスティクス(情報・資源管理)というもう1つの業務があると分析しています。

この2つを組み合わせ、最近図2のような絵を描いています。

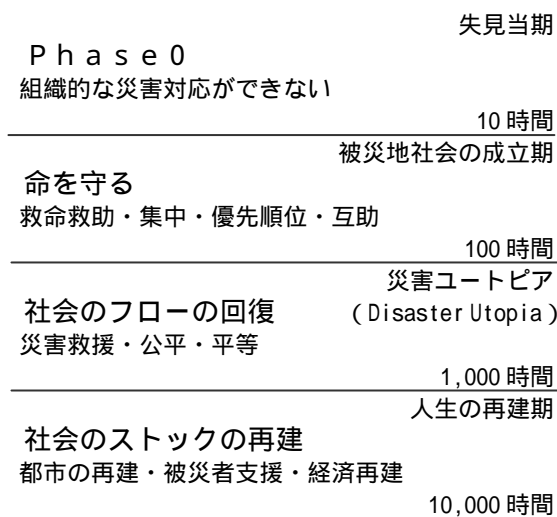


図2：復興までの道のり

まず「phase0」ですが、何が起こったかわからないような10時間で組織的な対応のない時間。次の100時間までというのは、命を守るためにいろいろなことがやられています。生活支障を体験するような、いわゆる被災地と言われているエリアの中での限定的なイベントです。次の1000時間ぐらいまでの間は、ライフラインが止まっているわけですから、そのときの活動の中心は社会のフロー回復ということになり、生活支障を体験した人と、その中のひどい人は自分の財産を失っているというようなところがターゲットです。1000時間たって社会のフローが回復されてしまうと、あとは自分にとって大切なものを失った人たちの、その失ったものの再建のプロセスが続く、というストーリー立てをしています。

そのときに、社会のストックとして、1つは「まち」というのは大変重要です。同時に、こういう高度に発達した社会では、そこに生活する「被災者」そのものが一番重要な社会のストックと考えなければいけないのでは、と考えます。そういう意味で「被災者の生活再建」というのがとても大きな課題になる。生活再建するためにはお金がいりますから、経済の再建なくしては先へ進みません。先程の心理的な時間が折れ曲がったあとに起こっ

ている問題が、この社会のストックの再建の問題、もう少し具体的に言えば、都市を再建し、被災者の生活を再建し、それらを可能にする手段として経済を再建するのだという1万時間に及ぶロングストーリーがあると考えていただければと思います。

ワークショップで草の根検証を

阪神・淡路大震災からの復興事業の基本的な構造は、図3のような三層構造をしていると考えることができます。これは、私はトルコの震災後にそう思うようになりました。

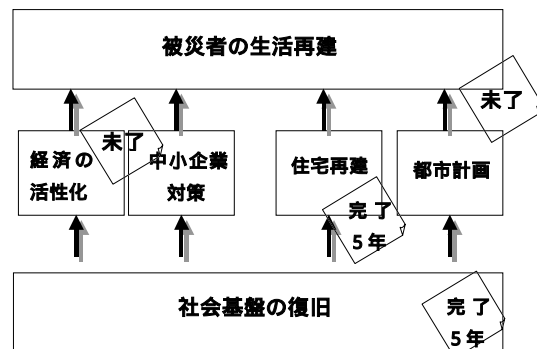


図3：阪神淡路大震災からの復興事業の進捗状況

5年経って見たときに、社会基盤の復旧は税金でやりましたから2年で戻せました。すまいというのは全ての基盤だろうと思いますが、5年で数的には提供しました。それ以外はまだ、というのが私の個人的な評価です。

そんな中で神戸市は、図3で言う一番下が「安全都市」、右が「住宅・都市再建」、左が神戸を活性化させる「経済・港湾・文化」、そして上が「生活再建」という4つのパーツに整理し、それを検証しようと考えたわけです。

その方法として、現場で頑張った人の声を聞き、市民と協働した「草の根検証」をすることによって復興に対する意識の共有化を図り、その中から21世紀への芽を積極的に見つけ、それを伸ばしていければ、と考えました。

そこで「市民を集めてワークショップをしよう」と小林さんに持ちかけました。この考えは、雲仙の復興について調べていて「有識者にはアイデアは出せない。地元の人たちの体験の中から出てきたものの方がはるかにいい」とわかりました。私たちの役目はそれらを整理したり磨いたりすることだと思ったのです。小林さんに無理を言って12回ワークショップをやってもらい、KJ法で、自分たちがこの5年間の中でいろいろ感じてきたことを1アイデア1カードに書いてもらいました。

出てきたカードは 1623 枚になりました。それらを整理し直すという大変な作業を田村さんにしてもらいました。それが図 4 です。

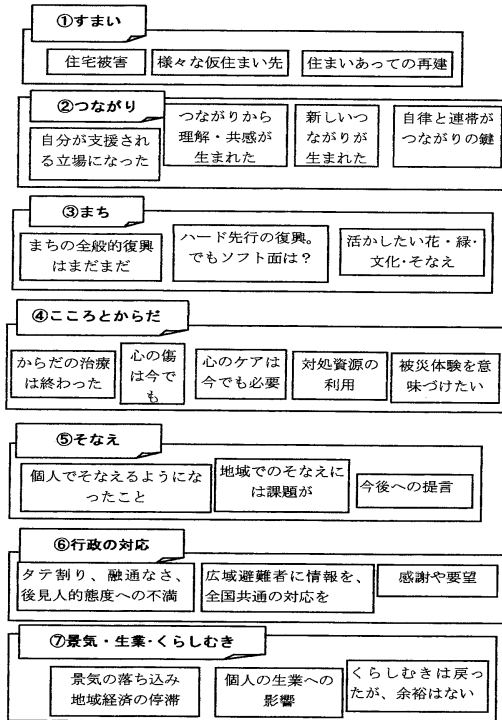


図 4：市民による検証結果

さらに、1623 枚の中でどういうカードが多かったかを整理してもらおうと すまい(489)、つながり(407)、まち(197)、そなえ(154)、こころとからだ(154)、くらしむき(138)、行政とのかかわり(84)となりました。

第 1 位、これはだれもが予想したとおり「すまい」の問題でした。兵庫県が 5 年かけて 13 万 8000 戸造ると言った施策の方向は間違っていなかったと思います。これはみんな納得していました。

問題は第 2 位でした。これは人と人との「つながり」の問題でした。正直言って阪神の復興の中で軽んじてきました。私の専門は社会心理学ですから「人と人との問題は大切です」と言いますが、自分でも半分はきれいごとを言っていると思うわけです。「あの混乱の中でそこまでの配慮はできるのか」というような妙な親心もあったりして、自信が持てなかった部分があったのですが、このデータを見てある意味では慙愧の念を持ちました。人間というのは 1 人で生きているわけではなく、ネットワークの中で生きている。そのネットワークをどう、あの環境の大きな変化の中で維持できるのかという問題は、決してきれいごとではなく、生活再建の中の非常に重要なエレメントだったのだらうということを痛感させられました。

被災体験を体系化して総体にし、知恵にする生活再建の 7 要素を防災の観点から考えると、それは Vulnerability を構成する 7 つの要素だと今は読み直しています。そして、図 5 のように定義してもいいのではないかと考えています。この Vulnerability をどうやって下げていけるかということになります。

生活再建の 7 要素	Vulnerability の観点から
つながり 行政とのかかわり	Lack of Social Support Network Lack of Proper Governmental Assistance(or Policy)
こころとからだ	Lack of Physical and Mental Health
すまい	Lack of Proper Housing
まち くらしむき	Lack of Proper Land Use Planning Poor Economic and Financial Situation
そなえ	Lack of Preparedness for Disaster

図 5：生活再建の要素と Vulnerability

例えば「つながり」ですが、Social Support を事前からエンリッチメントすればいいのではないかという議論ができます。「行政とのかかわり」は Proper Governmental Assistance あるいは Governmental Policy というような行政の側での防災対策があるか、その質は高いかというような問題に置き換えていいのではないか。「すまい」は難しいので、ここではむしろはっきりと住宅の問題と捉えたらいいのではないか、というふうに考えました。

Vulnerability の観点からこの 7 つを下げる、防災力から言えば左の 7 つを上げるということを実施化する、対策化する、日常化するということで使えるのではないかと思います。

エスノグラフィーに合わせて結論めいたことを言いますと、私たちは阪神・淡路大震災はパラダイムシフトが起こっている災害だと考えましたので、古いパラダイムで見えてはいけなと思うのです。私たちは新しいパラダイムを作る手助けをしなければいけないと考え、そのことをずっとやってきました。その過程で、どの被災者、あるいはどの災害対応者も実は災害は断片的にしか体験することができませんので、その体験を知恵にするためには断片を集めてコラージュを作り、総体化しなければいけない。しかも、その試みは現場から発信されなければいけないので、それらを体系化して総体にする仕事を研究者である私たちが引き受けたいのかなと思います。

(文責 細川)

事務局からのお知らせ

皆さん、おめでとうございます。21 世紀です。今世紀もよろしく願いいたします。21 世紀前半の厳しい状況乗り越えることができるようにこれからもいろいろ勉強していきたいと思えます。よろしくご協力ください。

1 月 19 日には災害対応研究会初めての試みである「オープンショップ」を神戸市国際展示場で開催します。この会では、わが国が地震の活動期に入ったということなので、京都大学防災研究所の橋本学先生に「21 世紀前半の地震事情」と題してお話いただき、引き続いて、研究会メンバーのパネル討論を企画しています。討論のテーマを「防災の分野で、2010 年ころホットな話題はなんだろうか」とし、パネリスト各位には、次のように趣旨を説明しました。

「先日、SONY 会長の井出さんのお話を聞く機会がありました。彼曰く、会社の中には 2 つのグループがあって、1 つは今の技術で 2005 年くらいまで何とか頑張ろうとするグループ、もう 1 つは 2010 年ごろ花開くことを目指して頑張ろうというグループだ、と言うのです。1 つの組織の中に必ずしも連続しない 2 つの動きがあり、互いに競いかつ支えながら前進するという話は大変感銘深いものがありました。そこで、これをヒントに、防災について考えてみようと思ったわけです。防災に関する現在の事業や研究は、1995 年の阪神淡路大震災のおかげを受けたものが少なくありません。この数年はその時点での想いを實現する過程だといっても過言ではありません。あと 5 年、つまり 2005 年ごろまでは、この枠組みで行きそうです。しかし、その先の枠組みがどのようになるか、見えていません。これまでの延長のままな

のか、これまでとは全く異質なものが生まれ、予想だにしていなかった方向に進むのではないか。こうした議論も重要だと思うのです。このパネル討論をそうした議論を始める機会と位置付けたいと考えました。2 時間で結論が出るようなテーマでないことはわかっています。荒唐無稽でも、無責任でも構いません。本音を聞かせていただければと思います。同時に、思うことは必ず實現するとすれば、まず一生懸命に思うことを始めたいと思えます。」

この会は公開ですが、基本的には仲間の集まりということで、フロアーからの積極的な参加も期待しています。

さて、来年度も本年同様、3 か月に 1 度のペースで、第 4 金曜日の開催を原則として、関電会館で開催させていただきたいと存じます。研究会の内容については、例によって独断専行で以下のような案を考えております。ご意見をいただければ幸いです。

4 月 27 日(金): ロボカップレスキューを学ぶ
北野宏明 (ERATO 北野共生システムプロジェクト
総括責任者)

田所 諭 (神戸大学工学部)

7 月 27 日(金): 災害救助の理論と実務を学ぶ
金芳外城雄 (神戸市市民局長)

“ We Are Back ”

宇野 裕 (厚生労働省保護課長)

大規模災害救助研究会のこと

10 月 26 日(金): 防災とインターネットについて学ぶ
早川由紀夫 (群馬大学)

干川剛史 (大妻女子大学)

1 月: 第 6 回震災対策技術展協賛

「第 2 回災害対応研究会オープンショップ」

現在、各話題提供者にご了解を求めている
ところです。(林春男)

編集後記

明日 1 月 17 日は、あの阪神・淡路大震災で犠牲になられた 6400 人を超える方々の 7 回忌です。東京で今日の新聞のテレビ欄を隅から隅まで探してみましたが、震災関連と思える番組が 1 本と、ニュース番組の中で扱われる話題がひとつあっただけです。記憶の風化と言われますが、こんなものなのでしょうか。災害にかかわって 30 年、いやというほど思い知らされたのが「そんなものさ」ということ。でも、被災体験はなくても、私はまだまだ忘れてやらない!! (けん)

「編集後記はなし? やっぱりあり?」このページまでたどりついて、初めて明かされます。もう皆さんもご承知のこのコンビ。前日がどんな状況かはお察しのことと思います。会報作成はや 1 年、もうそろそろこんな話題はやめよう、やめたい! と思うのですが、どうも教訓が生かされないようです。“今年こそは余裕を持って!” と気合いを入れつつも、握りこぶしに自信がないのはどうしてでしょう? 自分のことに限り、占いがよく当たる私...。(ふー)

災害対応研究会

事務局: 京都大学防災研究所巨大災害研究センター
〒611-0011 京都府宇治市五ヶ庄
TEL 0774-38-4280 FAX 0774-31-8294

ニュースレターに関するお問い合わせ:
細川顕司 TEL 03-3441-0119
青野文江 TEL 03-3682-1090